

# 菅原道真と九世紀の日本外交

高 兵兵

はじめに

菅原道真（845－903）は、平安前期の代表的な官僚、文人であり、宇多天皇の信任を受け、右大臣という高い地位についた人物である。彼の官僚生涯においては、渤海使接待、遣唐使受任、及び遣唐使停止など、諸々の外交活動の場で活躍していた。

本論文は、菅原道真が自ら編集した詩文集『菅家文草』の中の作品を取り上げ、関連の史料とも照り合わせることによって、道真が参与した外交活動の実態及び当時の日本外交の姿勢を窺おうとするものである。

## 一、菅原道真の生涯における外交活動

菅原道真の生涯における外交活動を列挙すると、彼は三回にわたって渤海使接待に関わり<sup>1)</sup>、そして最後の遣唐使派遣に大きく関与している。以下、『菅家文草』と関連史料に基づき、年代順にこれらの活動をまとめてみる。

### 1、貞観十三年（871）－貞観十四年（872）（27歳－28歳）

渤海使楊成規一行を迎えるために、道真は貞観十三年一月二十九日に「玄蕃助」に任命された（『北野天神御傳』）。当時の道真はすでに対策及第し、正六位に叙せられていた。「玄蕃助」に任命されたのは、おそらく彼の文才によったものであろう。

翌年の正月六日にまた「存問渤海客使」に任命され、楊大使一行を迎えに加賀へ赴くことが決められた（『日本三代実録』）が、母憂で一月十四日にまた解官となった。それで道真はこの時直接渤海使接伴の機会を逃したが、五月に「答渤海王勅書」と「賜渤海入覲使告身勅書」という二つの外交文章を起草した（『菅家文草』巻八）。

### 2、元慶七年（883）（39歳）

前回の渤海使来朝より11年後、道真は初めて直接渤海使の接伴に加わっている。彼は、仮に「禮部侍郎」（治部大輔の唐名、外務次官にあたる）と称され、元慶七年四月二十八日より五月十二日にかけて、島田忠臣や紀長谷雄等とともに、渤海使裴頤一行を接伴し、漢詩の唱和を繰り返

した。この活動の由緒や委細については、道真自身によって詳しく記録されている。

余以禮部侍郎、與主客郎中田達音共到客館。…始自四月二十九日用行字韻、至於五月十一日賀賜禦衣、二大夫、兩典客、與客徒相贈答同和之作、首尾五十八首。更加江郎中一篇、都慮五十九首。（『菅家文草』卷七「鴻臚贈答詩序」）

以上の記述によっては、当時交わされた詩が58首もあったと分かるが、現存しているのは、『菅家文草』巻二に見られる9首と、『田氏家集』に見られる7首である。

「主客郎中田達音」は、即ち島田忠臣のことを指す。また、「二大夫、兩典客」の中の一人は、紀長谷雄である（『田氏家集』「繼和渤海裴使頭見酬菅侍郎、紀典客行字詩」、『菅家文草』「去春詠渤海大使與賀州善司馬贈答之數篇、今朝重吟、和典客國子紀十二丞見寄之長句、感而翫之、聊依本韻」）。島田忠臣と紀長谷雄が、道真の真の「詩友」であり<sup>(2)</sup>、三人の集まりは、当時日本漢詩の水準を代表するものと言えよう。

### 3、寛平六年（894）（50歳）

この時道真はすでに参議に任ぜられ、高い地位についている。この年彼の外交活動は、唐に関わることばかりである。七月二十二日に、太政官の代わりに「奉勅爲太政官報在唐僧中瑾牒」（『菅家文草』巻十）を書いている。文の中では、国の遣唐使を派遣する意向を示した。従って、一ヶ月後の八月二十一日に道真は遣唐大使と任命された（『日本紀略』）。しかし一か月も経たないうちに、九月十四日に道真はまた「請令諸公卿議定遣唐使進止状」（『菅家文草』巻九）を奏上し、朝廷に遣唐使派遣を考え直してほしいと諫めた。そして最後、九月三十日に遣唐使派遣が停止となった（『日本紀略』）。

道真が関わった遣唐使派遣停止は、結果として数百年続いた日本遣唐使の幕閉じとなった。それで、これが日本歴史上の重大事件とされ、研究と議論が繰り返されてきている<sup>(3)</sup>。

### 4、寛平七年（895）（51歳）

寛平六年、裴頌が引率する渤海の使節が再び来朝し、翌年の五月七日に入京した（『日本紀略』）。道真はこの時再び紀長谷雄とともに鴻臚館へ行って接伴し、裴頌と十二年ぶりに再会し、漢詩の酬和を繰り返した。この時のことについては、『菅家文草』巻五「客館書懷、同賦交字、呈渤海裴令大使」の詩に付く、

自此以後七首、予別奉勅旨、與吏部紀侍郎詣鴻臚館、聊命詩酒。大使思舊日主客、將賦交字、一席響應、唱和往復。

という道真自身による題注より知ることができる。また、『前田家本北野天神禦傳』にも同じ内容が記録されている。

今年渤海大使裴頌重來朝。別奉勅與式部少輔紀長谷雄、到鴻臚館。聊命詩酒、唱和往復、遠及數篇。日暮賦餞別詩、門生十人著麴塵衣從其後焉。後代別學生能屬文者十人預餞客之座、

自此之始也。

上にあげた二つの記事から分かるように、十二年前と同じように、紀長谷雄が二度目に道真とともに渤海使接待に加わった。このとき長谷雄の官職は「吏部侍郎」即ち「式部少輔」であったことも分かる。十二年前と異なるのは、島田忠臣が四年前に亡くなり、この二度目の交流活動に加わっていないことと、もう一つ、道真が十人の「屬文」の門生十人を連れてきたことである。そして門生十人を連れてきたことは、よほど評判がよかったのか、後代の接客の恒例となったようである。

## 二、日本と隋唐・新羅・渤海間の使節往来頻度の変遷

以上菅原道真が関与した外交活動を簡単にまとめてみた。では、これらの外交活動からどんな特徴が読み取れるのか。『菅家文草』の関連詩文を詳しく分析する前に、九世紀日本の対外関係の大きな背景を把握しておきたい。下記の表は、七世紀から九世紀まで、日本と隋唐・新羅・渤海間の使節往来の頻度を大雑把に並べたものである<sup>(4)</sup>。

	遣隋唐使	隋唐来使	遣新羅使	新羅来使	遣渤海使	渤海来使
七世紀	11回	3 (+4) 回	10回	11回		
八世紀	10回	1 (+1) 回	14 (+1) 回	10回	13回	14回
九世紀	3回	0回	( 3) 回	1回	1回	17回

\* ( )内は、正式な使節ではない場合である。

この表からはっきり分かるように、七世紀と八世紀はどちらかという派遣のほうが盛んだったが、九世紀になると、派遣するほうが激減し、受け入れる一方となっている。つまり、九世紀日本の対外関係は、それまでの積極的に外へ出る姿勢と打って変わって、国内に止まって使節を受け入れるのが主となったと言えよう。もちろん、相手国によって事情が違う<sup>(5)</sup>ことを考慮しなければならぬが、それにしても、以上の特徴が揺るがせないものであろう。

では、菅原道真の外交活動は以上の背景とどうつながっているのか。以下、二節にわたって道真の関連詩文を分析し、九世紀日本外交の具体的な特徴を窺ってみよう。

## 三、菅原道真の渤海使接待に見る日本外交

### 1、「仮称」の意味

「鴻臚贈答詩序」の題注に「元慶七年五月、余依朝議、假稱禮部侍郎、接對蕃客。故製此詩序。」とある。また、『菅家文草』卷二「餘近敘詩情怨一篇、呈菅十一著作郎長句二首、偶然見誦。更依本韻、重答以謝。」の自註においても、「更被勅旨、假號禮部侍郎、與渤海入覲大使裴頌相唱和。」と同じような記述がみられる。この二つの記事から分かるのは、道真はこの渤海使接待にあたって、朝廷から臨時的な官名を与えられたことである。しかも道真のみならず、忠臣もこの時臨時

に「主客朗中」（玄蕃頭の唐名）の仕事に任されたのである（『日本三代実録』元慶七年四月二十一日条）。そして紀長谷雄もまた、この接伴活動に対応するために、四月二日に「掌渤海客使」と任命されたのである（『日本三代実録』）。

では、このような「仮称」はどういう意味を持つだろうか。まずは、当時の日本朝廷が渤海使接待のことを非常に重視し、事前に対応を工夫していたことがいえよう。もう一つは、接客の人は一定の身分を持っていなければならないことを意味し、外交礼儀が守られていたことの現れだと言えよう。

もちろんそれだけではない。道真と忠臣と長谷雄の三人が選ばれたこともそれなりの意味があるろう。『日本三代実録』「元慶七年四月二十一日条」には、以下の記述がある。

以従五位行式部少輔兼文章博士加賀權守菅原朝臣道真、權行治部大輔事。以従五位上行美濃介島田朝臣忠臣、權行玄蕃頭事。為対渤海大使裴頌、故為之矣。

つまり、大使が裴頌であることを知って、それに対応するために道真と忠臣が選ばれたのである。裴頌はどんな人物かといえば、

裴大使、七歩之才也。（『菅家文章』卷七「鴻臚贈答詩序」）

裴頌高才、有風儀也。（『日本三代実録』元慶七年五月十日）

とあるように、かなりの文才の持ち主である。道真等三人が詩才に富んでいるから選ばれたと言えよう。

ようするに、朝廷は相手の文才に敵する人物を選ぶのであった。選ばれた人が官位が低くて接伴に相応しくない場合は、「仮に～と称す」という対策を取ったのであろう。実はこのような事例は、以前にもあった。『日本三代実録』「貞觀元年（859）三月十三日」条に、

渤海國副使周元伯、頗閑文章。詔越前權少掾從七位下島田朝臣忠臣、假為加賀權掾、向彼與元伯唱和。以忠臣能屬文也。

とあるが、意図といい、方法といい、元慶七年の場合もまったく同じである。このように、渤海使接伴にあたって、文才の持ち主が選ばれ、仮に身分と官名を与えられたことは、九世紀の日本において一般的だったようである。

また、『日本三代実録』に、

（宿彌）氏守為人長大、容儀可觀。權為玄蕃屬、向鴻臚館供宴饗送迎之士。（貞觀十四年五月十五日）

於朝集堂賜饗渤海客徒。…擇五位已上有容儀者卅人侍堂上座。從五位下守左衛門權佐藤原朝臣良積、引客就西堂座供食。…良積依有儀兒、俄當此選。（元慶七年五月十日）

などとあるように、文才のほかに、容姿も接客役に抜擢される基準の一つだったようである。

## 2、「七歩之才」との漢詩唱和

渤海と日本の双方とも文才の持ち主が選ばれる傾向がみられるが、それは、主客の間で漢詩唱和をするのが東アジア諸国の間の外交慣例となっていたからである。もちろん、「唱和」といっても、口に出して詠むのではなく、紙に書くのである。それにしても、双方とも漢字が読み書きできるということが前提でなければならないし、詠んだ詩の語句と内容も、古代中国より伝わった儒学や仏教など共通の知識をベースにしたものでなければならない。中国文化の中心地より遙か遠い土地において、異国同士の人々が漢字を書くことによって考えや気持ちを交わす、ということ自体に大きな意義があろうが、ここでは触れない。本論文の関心は、漢詩唱和の場における渤海使と日本側の接客陣の実態にある。

「鴻臚贈答詩序」には、

余與郎中相議、裴大使七歩之才也、他席贈、疑在宿構。事須別預宴席、各竭鄙懷、面對之外、不更作詩也。議成事定、每列詩筵、解帶開襟、頻交杯酒。凡厥所作、不起稟草、五言七言、六韻四韻。默記畢篇、文不加點。(『菅家文草』卷七)

とあるが、道真と忠臣が、事前に詩を作っておいたと裴頌大使に疑われないために、当日宴席の場において即興且つスピーディーに詩を作るという対策を考えたという。かなり細かに対応策を練りこんでいると言えよう。

このように、朝廷も接客の個人も、渤海使に接するために、事前に万膳な準備と対応をしている。しかし、事前に対策を練るも、いざ対面するとどうなるだろう。『日本三代実録』「元慶七年五月十日」に、

從五位下守左衛門權佐藤原朝臣良積、引客就西堂座供食。…良積依有儀兒、俄當此選。大使裴頌欲題送詩章、忽索筆硯。良積不閑屬文、起座而出。頌隨止矣。

とあるように、裴頌が宴席の上で即興に詩を書こうとしたが、容姿のみで接待に選ばれ詩文に素人の良積がうろたえて席を離れたという。また、裴頌の詩才に驚いたのは、素人の良積のみならず、詩人である島田忠臣も、

驚見裴詩逐電成(『田氏家集』卷中「酬裴大使答詩」)

詩媒逐電激成章(『田氏家集』卷中「繼和渤海裴使頭見酬菅侍郎、紀典客行字詩」)

と、裴頌の詩を作る速度にかなり驚いたようである。その才能に圧倒されそうになったのであろう。

道真はどうであろうか。『菅家文草』には、今回の漢詩唱和活動について、裴頌と道真自身、そして世間体が下した評判がすべて揃っている。まずは、「詩情怨」(『菅家文草』卷二)という

詩においては、

去歳世驚作詩巧、今年人謗作詩拙。  
鴻臚館裏失驪珠、卿相門前歌白雪。

とあるが、以前世間に詩を作るのが上手だとかちやほやされていたのが、裴頌一行と唱和したあとは、世間に詩を作るのが下手だと言われるようになったという。そして「鴻臚館裏失驪珠」の一句によれば、道真も自らの失敗を認めたと分かる。彼の反省はこれに止まらず、次の詩においては、さらに思考を深め、詩を本業としてきた自分の生涯を振り返り、内心の遣る瀬無さを訴えている。

余近絃詩情怨一篇、呈菅十一著作郎。長句二首、偶然見訓。更依本韻、重答以謝。

生涯我是一塵埃、宿業頻遭世俗猜。

東閣合將眞咳唾、北溟賣與僞珍珠。

三條印綬依恩佩、九首詩篇奉勅裁。

來章曰：「蒼蠅舊讚元台弁、白體新詩大使裁。注云：近來有聞裴頌云、禮部侍郎得白氏之體。」余讀此二句、感上句之不欺、兼下文之多詐。訓和之次、聊述本情。余心無一德、身有三官。愆而言之、事緣恩獎。更被勅旨、假号禮部侍郎、與渤海入覲大使裴頌相唱和。詩惣九首、追以慙愧。故有此四句。

長い自註において、「菅十一著作郎」の「來章」の二句と注が引用されているが、それには、裴頌が道真に対する評判がみられる。道真の詩が白居易の体を得ていると裴頌は言う。しかし、それを聞いた道真の態度は冷ややかなものであった。つまり「白體新詩だと裁いてくれた大使の言葉は、きっと嘘だ、お世辞だろう」と疑い、内心においては「追以慙愧」と思っているという。道真はこのことでもかなりダメージを受けていただろう。それでか、寛平七年に裴頌が再度來た際に、道真は十人の門生を連れて対陣した（『前田家本北野天神禦傳』、前文に引用あり）。雪辱をしたいという気持ちはきっと多少あっただろう。

以上のように、裴頌と交流することによっては、道真や忠臣という当事者の詩人たちから世間一般の人まで、自分のほうの才能が渤海來使に及ばないことを認識させられたといえよう。言い換えれば、渤海來使が文才に優れる人が多いと分っているからこそ、朝廷も接客陣もいつも恐る恐るに対応していたことであろう。

渤海と日本の詩人に才能の差が存在しているのは、おそらく事実であろう。なぜなら、漢字文化を学ぶことにおいて、朝鮮半島の国は日本の先師だからである。大陸と一体となっている半島と、海を隔てる島国とが、漢詩を作るレベルに多少差が存在してもおかしくはない。

ここで一旦、道真の渤海使接伴に現れる当時日本外交の特徴をまとめてみる。

①朝廷も接客の個人も重視し、事前にしっかりと対応策を整うこと。

②秀才と美貌の持ち主に接伴の仕事が任せられること。特に相手と漢詩唱和ができるのは決め

手である。

③接伴にあたっては、相手に圧倒されたのか、やや不器用さを感じさせる。

#### 四、菅原道真と遣唐使停止に見る日本外交

菅原道真と遣唐使派遣及び停止に関わる一連の出来事は、寛平七年七月から九月までの二ヶ月余の間に集中的に起きている。

- ・七月二十二日、「奉勅爲太政官報在唐僧中權牒」（『菅家文草』巻十）を書いた。
- ・八月二十一日、遣唐大使と任命された（『日本紀略』）。
- ・九月十四日、「請令諸公卿議定遣唐使進止状」（『菅家文草』巻九）を奏上した。
- ・九月三十日、遣唐使派遣が停止となった（『日本紀略』）。

七月の文章にある「朝議已定、欲發使者」と八月に遣唐大使に任命されたことからみると、朝廷には当初遣唐使を派遣するつもりは確かにあった。しかし、九月十四日に道真が派遣を阻止する内容の奏状を出したので、それが九月三十日の停止決定につながった、と表面的に見ればそうなる。

『日本紀略』の二つの記事によれば、朝廷が前後に矛盾しているのは事実であろう。一方、道真の二つの文章にも、確かに前後矛盾している部分がある。しかし、道真と朝廷を簡単に結ぶのが短絡に思う。なぜなら、二つの文章ともに道真が書いたのは間違いがないが、立場が異なることを忘れてはいけない。つまり、七月に在唐僧中權に出した牒文は太政官のために書いた、いわゆる代筆であるのに対して、九月に書いた奏状は大臣としての自分自身の考えを述べたものと思われる。それで、二つの文章に多少矛盾が見られてもおかしくはない。

しかも道真の二つの文章には、前後一致しているものも少なくなく見られる。一つは、

雖感宿懷、稽之舊典、奈容納何。（「奉勅爲太政官報在唐僧中權牒」）

儀制有限、言申志屈。（「奉勅爲太政官報在唐僧中權」）

臣等伏檢舊記（「請令諸公卿議定遣唐使進止状」）

と見られるように、前例と朝儀に従って慎重に対応する態度が一貫としていると言えよう。実は「鴻臚贈答詩序」に「尋案舊記、二司大夫、自非公事、不入中門。」とあるように、道真のこのような慎重な態度は、渤海使接伴の際にも見られる。外国のことに對して一貫して慎重な態度を取っていた道真だからこそ、「請令諸公卿議定遣唐使進止状」を奏上し、「國之大事、不獨爲身、且陳疑誠、伏請處分」と諫めることに至ったのであろう。道真のような人が居たのは、国にとって幸いなことかもしれない。

二つの文章において、もう一つ一貫としている点は、

久阻兵亂、今稍安和。…如聞商人說大唐事之次多云、賊寇以來、十有餘年。（「奉勅爲太政官報在唐僧中權牒」）

在唐僧中瓊、去年三月附商客王訥等所到之録記、大唐凋弊、載之具矣。（「請令諸公卿議定遣唐使進止狀」）

と見られるように、当時の唐に対する認識である。中瓊や商人等が寄せた便りによって、唐が近年兵乱や賊寇が横行し、「凋弊」つまり衰えてきていると認識された。実際に唐は十三年後に滅びたので、道真と日本朝廷の判断は正しかったと言えよう。

また朝廷も、一応遣唐使派遣を決めたものの、同時に「又頃年頻災、資具難備。而朝議已定、欲發使者、辨整之間、或延年月。」（「奉勅爲太政官報在唐僧中瓊牒」）と派遣の困難さも言い出している。それは、「大官有問、得意敍之者」とあるように、「朝議已定、欲發使者」自体が朱褒に対して場を切る言い逃れであり、当初より逃げ道を作っておいたと言えよう。つまり、朝廷としても、当初より遣唐使派遣の意図が強かったとは言い難い。

日本朝廷が最終的に遣唐使派遣まで踏み出せなかったのは、当時日本外交の大きな流れとも一致していると言えよう。前文に表で示したように、九世紀になると、日本の対外関係はそれまでの積極的に外へ出る姿勢が見えなくなり、受動的に來使を受け入れるのみの一方通行のものになってしまった。道真の「奉勅爲太政官報在唐僧中瓊牒」にも、「更告不朝之間、終停入唐之人」と、九世紀日本の遣唐使派遣の消極性を示す表現が見られる。

消極性はまた、外国の物事に対する恐れとしても現われている。前文で述べた、良積が裴頌の前でうろたえてその場から逃げだした事は、その一例だと言えよう。道真も「請令諸公卿議定遣唐使進止狀」において、「度使等、或有渡海不堪命者、或有遭賊遂亡身者」と渡唐の恐ろしさを述べている。彼が遣唐使派遣をなんとか阻止しようとしたのは、渡唐に対する恐怖も多少あったのではないだろうか。幸い道真は、朝廷の派遣停止によってそれ以上悩む必要はなくなった。承和年間遣唐副使に任命された小野篁の場合は、船に乗る前に病気を装い、そして「西道謠」を作って朝廷の遣唐使派遣を諷ったために、嵯峨天皇に怒られ隱岐島に流された（『続日本後紀』承和五年十二月十五日）。

以上のような事例から、九世紀の日本貴族たちの性格が窺える。794年の平安京遷都は、日本の各方面に大きな変化をもたらした。九世紀の百年間を経て、日本は「律令制」から、徐々に日本独自の「摂関制」へと移り変わった。その間、貴族や官僚は終日宴席を設けて花鳥風月を詠み、恋に深け、享樂な生活に耽溺するようになり、性格も繊細多感となってきた。当時の日本外交に見る消極性もこのような繊弱な文化的特徴の反映の一つだと言えよう。

## 結び

以上、菅原道真の詩文及び関連史料を通して、当時の日本外交を特徴を窺ってみた。それは、①受動的であったこと、②消極的であったこと、③慎重的であったこと、④やや不器用であったこと、などが挙げられる。

歴史事件の真実を一つ一つ個別に究明することも勿論大切であるが、本論文のように、一つの人物の生涯を追い、且つそれをその時代全体の流れに置いて見ることも重要であると言えよう。



註

- (1) 菅原道真の渤海使接伴については、太田英比古「菅原道真と渤海使接伴」(『政治経済史学』386、1998)、田中隆昭「菅原道真と渤海使―「高麗人と文作りかはす」という表現の背景―」(『平安朝文学研究』復刊9、2000)などの論考がある。
- (2) 拙論「菅原道真詩における「詩友」―白居易との比較を中心に」(大阪大学国語国文学会『語文』84・85合併号、2006)をご参照ください。
- (3) 戦後の主な研究は、森克己「遣唐使廃止に対する再吟味」(『史淵』50、1951)、同氏『遣唐使』(至文堂、1955)、坂本太郎「菅原道真と遣唐使」(『歴史教育』1962)、龍肅「寛平の遣唐使」(『平安時代』春秋社、1962)、鈴木靖民「菅原道真と寛平の遣唐使」(『菅原道真と太宰府天満宮 上巻』吉川弘文館、1975)、同氏「遣唐使の停止に関する基礎的研究」(『古代対外関係史の研究』吉川弘文館、1985)、佐藤宗諄「寛平遣唐使派遣計画をめぐる二、三の問題」(『平安前期政治史序説』東京大学出版会、1977)、増村宏『遣唐使の研究』(同朋社、1988)、石井正敏「いわゆる遣唐使の停止について」(『中央大学文学部紀要』35、1990)、同氏「最後の遣唐使計画」(『新版日本の古代 二』角川書店、1992)、森公章「菅原道真と寛平度の遣唐使計画」(『続日本紀研究』362、2006)などがある。
- (4) この表は、田島公「日本・中国・朝鮮対外交流史年表」『貿易陶磁―奈良、平安の中国陶磁』奈良県立橿原考古学研究所附属図書館、1992)、そして上田雄・孫栄建共著『日本渤海交渉史 改訂増補版』(彩流社、1994)や東野治之『遣唐使』(岩波新書、2007年)に附してある年表等を参照して作成したものである。
- (5) たとえば、隋唐との間は全体的に遣使が多く来使が少なかったことや、九世紀に入って新羅との関係が悪くなったことなど。